

# ダーク・ブルーズ

早起き三文

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地球連合軍とプラントとの最終決戦「ヤキン・ドゥーエ戦役」が終了した後、プラントの軍事組織「ザフト」のエースパイロットであったイザーク・ジュールはプラント評議会から二組の「青い制服」を受け取る。

そして、モビルスーツ戦用の青服を纏った彼の前に現れた女性パイロットの名前に対し、彼は常に平常心を維持するように心掛けながら仕事に取り組むのであった――

機動戦士ガンダムSEEDとDESTINYの間を描く二次創作です。イザークさんのファンは怒らないで頂ければ有り難いです。

# 目次

第1話	「キラ・キール」	1
第2話	「自由が放つ楔」	30



# 第1話 「キラ・キール」

「イザークさん」

「何だ？」

「青服、新しいパイロットスーツの着心地はいかがですか？」

搭乗機から自分が降りるなり、そう訊ねてきた女性パイロットの顔を見て、露骨にイザークはうんざりをする。

「だからな、お前」

「私はお前と言う名前ではありませんよ」

「ハア……」

イザークにしてみれば、大昔の軍隊映画に出てくる鬼軍曹のように彼女をアダ名で呼びたくて仕方がないのだ。彼女の本名は彼の神経を無用にささくれさせるのだ。

「今な、任務中だろう？」

「それゆえ、隊長のメンタルは良い、と思ったのですがね」

「この地球のドブ色をしたパイロット・スーツを纏っている間は俺の機嫌が良くなるこ

とはないな」

ドブ色、そのダークブルーに染め上げられたパイロットスーツが放つ深い暗青の光沢、それは確かに地球の海溝の底から湧き出た冥界の色という印象を見る人へ与えるかもしれない。

「それに、軍人として俺がお前に望むのは」

「ザフトは準軍隊組織ですよ、隊長」

自分と初対面時に起こった出来事をいつまでも根に持つ彼女の気持ちは充分に解り、半分は自分自身にも責任があるとは思っているが、それでもイザークとていちいち突っかかる人間など本当なら相手にしたくないのだ。

「こっちの事を聞けと言っているんだよ、俺はさ」

そう不満げに言いながらイザーク・ジュールは、宇宙へと浮かぶ小惑星をくりぬいて造られたモビルスーツのテスト場、そこから延びているコードへと係留されている実験機の方へその指を差してみせる。

「フリーダム・ジャステイス・ゲイツの事を聞いてよろしいので?」

「ああ、そうだ……」

わざわざ「フリーダム」の部分だけを強調して言葉を放った彼女に対しても、もはや彼は頭へ血は昇らない。

「フリーダム、の調子は？」

クウ……

わけでも無いらしいと、イザークはパイロットスーツ内で軽く唸りながら、一つ大きな深呼吸をしてから、彼女の顔を正面から睨み付ける。

「終わった話だろうに」

「キラ・ヤマトとの戦いも？」

「そうだな、そうなるよ……」

そう、終わったのだ。彼らプラントへ所属をする宇宙の民と地球の連合軍との戦いは。

「確かにそうですね」

ヘルメットをかぶったままでも飲める飲料チューブを持ってきてくれたもう一人の女性パイロットのその言葉に、イザークは軽くその顎を上げて彼女へ頷いてみせた。

「軍縮の動きがあります、イザーク隊長」

「そのようだな」

「ザフト・ガンダム系の生産終了が正式に決定したようです」

「ガンダムタイプの問題ではなく」

お互いヘルメット内の顔が見える距離までに宙を漂いながらイザークへ近付く若い

女性に対し、受け取ったドリリンクチューブの中身を口へ含みながら、彼は先程まで搭乗をしていた自分の機体へと視線を向け、軽くその首を振る。

「動力源の問題、俺はそう聞いた」

「やはり、そうでしたか……」

その言葉に彼女は薄くその顔色を陰らせつつも、少しイザークと彼女の上方へとその身体を浮かばせる、この部隊の隊長であるイザークといささか仲が険悪である女性パイロットへもドリリンクを手渡すために、彼女はパイロットスーツ越しでも魅惑的に映るその肢体を無重力の中で軽く跳ねさせた。

「やはりあの核エンジン、封印されるのですってね」

「良い事だろうか？」

「技術畑の出身としては、やや物足りない」

「戦争屋気質のある俺の方が、どこかホツとしているのは何だよ？」

技術系として後方での仕事が多かった彼女と、最前線任務が多くを占めたイザーク・ジュール。もしかしたら彼の方が戦いの中、強力な兵器に対する「恐れ」を肌で感じられる機会が多かったのかもしれない。

「血気にはやる後方組はいただけないと思います」

「お前が人の事を言えた柄かよ、シホ？」

「フフ……」

その彼の軽く微笑みながらも彼女は、この自分の隊長が二足の草鞋の状態とはいえ、戦争の恐ろしさを知る文章の管理組となるのは。

「平和の有り難みを知る、良い官僚になられるのかしらねえ……」

「ん、何か言ったか？」

「いえ、何でも」

試験機、若干旧式の火器管制調整機のチェックを行っているメカニック達と相談をしあっているが為に、イザークには彼女の独り言は聴こえなかつたようだ。

フウ……

メカニックのメンバーに呼ばれ、宙へ浮かび続けていたダークブルーを纏う女性がイザーク達の元へ舞い降りてくる。

「1時間後、模擬戦をやるぞ」

「ハッ!!」

イザークの言葉に対して鋭く敬礼をしてみせた女、彼女が何かを言おうとその上唇を僅かに上げた時。

「俺はこのフリーダム」

これ以上この女へ語尾を取られ、からかわれるのはたまらない。イザークはあえて機

先を制し、彼にとっては苦い記憶のある機体、ガンダムタイプOS搭載機の名前を強く言い放った。

「火器運用試験型のフリーダム・ジャスティス・ゲイツを使う」

「すぐにひねくれる人……」

「貴様は」

そのちやちやを入れる声を無視して、イザークは静かに彼女へ命令を下す。

「アグレッツサ・ガンダムを使い」

「何だかんだ言って私情を入れる……」

「お前まで、この出来損ない達の様な口調の真似をするな」

「ハッ……」

彼がハツキリとこの青服達への蔑称を口にするのは珍しい。機嫌の悪い今の彼には軽口は言わない方が良く、元技術者上がりのパイロットであるシホは思い。

「アグレッツサ、1時間では準備が出来ません!!」

「たるんでいるぞ、お前達!!」

「また始まった……」

「何が始まったか!?!」

「何も始まってませんよ、イザーク隊長!!」

メカニック達へ八つ当たりとも受け取れる言葉をその身に付けているヘルメットが割れんばかりに響かせるイザークの後ろ姿を眺めながら、青服テストパイロットである「キラ・キール」の元へとその身を宙へ泳がせた。

「貴様のその動きが!!」

火器運用試験型ゲイツ、イザークの駆るその機体の活動時間は極めて短い。核動力の使用を前提にされている武装や機能の数々は通常電力で賄えるものではない。

「あいつに似ている!!」

「悪うございしましたね、イザーク隊長!!」

イザーク機からのレール砲による射撃を身軽にかわしながら、怒鳴り返しているキラが搭乗するアグレッサ・ガンダムもまた、彼と全く同じ武装で反撃をしかけた。

「貴様のその耳が!!」

「ハア……」

観測機で二機の模擬戦を観察しているシホが、その私情を剥き出しにしている上官筋の顔が大写しにされているモニターを眺め、軽くため息をつく。

「あいつに似ている!!」

「私は自分の顔が好きなのに!!」

「ジャアアン……!!」

イザークのゲイツのサーベル、ビームの刃がアグレッツサと交差をし、周囲へ強い閃光を放った。

「規定出力を越えますよ、そのラケルタは!!」

「ならば、貴様も上げれば良い!!」

「そりゃ、あなたと同型なので出来ませんがね!!」

模擬戦とは言え、イザークには全く手加減をする様子が見られないのが解り、彼女も自機のビームサーベルの出力を上げ始めた。

「貴様のその機体があい……!!」

「このアグレッツサは!!」

「人の間を遮るな!!」

ズウ!!

ゲイツの背部に備え付けられた、運搬機ファトウムユニットが使用直前に故障をし、

火花を上げ始めたのに対してイザークは忌々しげにその舌を打ながら、再度キラのアグレッサへと斬撃を放る。

「電力型フリーダムですので、似ているのは当然でしょう!？」

バルカン砲の代わりに言葉で先手を取ったキラを無視し、イザークの機体はそのままアグレッサへと突進をかけた。アグレッサは目を鼻と耳がある所が!!

「あなた、苛立っているんでしょ!？」

ジン……!!

そのラケルタサーベルの光を見事に捌き、体勢を崩したイザーク機を尻目にしながら、アグレッサはそのままゲイツと急速に距離を取る。

「裁判結果がマズイと、近い内にそのクビが飛んでいってしまうという事に!!」

「自分で選んだエゴだよ!!」

ゲイツのкокピット内に、残り稼働時間が半分になったという警報が鳴り響く。電力残量、モビルスーツの行動源が四分の一になった所で模擬戦闘は終了だ。

「後悔はしていない!!」

「青服を着る羽目になったというのも!!」

アグレッサ、電気動力型フリーダムガンダムも残り行動時間が半分となる。キラにし

てみれば、何かとやかましいこの目上の男を少し痛い目に合わせてやりたいものではないのだが。

「さらに苛立ちを増させているのね!!」

「赤は敬礼で止まり、青はスルーだ!!」

遺伝子異常を起こしているコーディネーターからなる部隊の隊員が身につける青服、地球の深い海の底の色をしたダークブルーの服。それは確かに皆から、物理的に通路ですれ違った場合でも。

「無視をされるとするのは、あのいけすかない男が乗る本物のフリーダム、奴から味わっているさ!!」

「あつちのど偉いキラの眼中に無かったという事でしように!!」

精神的、人間関係上でも距離を取られるのが宇宙に住む民、コーディネーターの社会だ。

「そして、そのキラ・ヤマトの名前に!!」

ドッ、トツドオ!!

実戦では無謀と判断をされる急速接近を頭部バルカンからの牽制と同時にしかけるイザークの機体へ放ったアグレッサのライフルは暴発を起こし、その爆発の隙を縫い、ゲイツがキラの機体へ迫る。

「お前が似ている!!」

「同じ名前でも本当に!!」

ゴウ……!!

ガンダムタイプ、核動力モビルスーツの臨床機として徹底的に酷使をされ、廃棄予定であった機体を模擬戦専用の機体として甦られたアグレッサ、その背部の機動制御ウイングが何故か停止を始めてしまった。

「悪かったわねえ!!」

ズウン!!

ダミーに近いアグレッサのウイング機体制御システム。そんなものでも僅かには機体の機動性に影響はあるように見える。

「女のクセに男の名前を恨めよ、キラ!!」

ズウオ……!!

「何が男?!!」

機動性が落ちたアグレッサでイザーク機の脚による蹴り上げを寸前でかわしたのは、彼女の身体ステータス「良」状態での技量の高さ故であろう。

「隊長!!」

「男同士の戦いに口を挟むな、シホ!!」

「模擬戦を中止して下さい!!」

「挟むなど言っている!!」

そのイザークの怒声から察するに、キラのアグレッサ、フリーダムガンダムと全く同じシルエットの機体と戦っている内に、本当に彼イザークの脳天へと血が揚がってしまつたらしいとシホには推測が出来る。

「誰が男ですってね!？」

「戦場で性別は関係ない!!」

「ならば、わざわざと男だと言い放つ事は!!」

容赦をする気が無くなったキラ、キラ・キールは使用が厳禁されているプラズマビーム砲を機体背部から肩の上へと持ち上げた。

「なかりうなまいねえ!!」

ヴォフォ!!

どうせ間も無く終了する模擬戦だからと思ひ、機体の余力を全てビーム砲から撃ち放つキラ。もはや手加減など念頭から無くなってしまったように見える。

ギイ、ギイア……!!

「パワーダウンだと、ゲイツ!？」

近距離から迫りくるビームの波動をかわそうとした途端、ゲイツの機体出力が低下を

してしまった事にイザークはその端正な顔をひきつらせながら、その自機の両腕をコクピットを守るように胴の前へと交差させた。

「かわさないのか、イザーク隊長!？」

彼へ一泡ふかせる気でいたキラにしても、彼ならばビームをかわせると思っていた彼女は、その面へ出た驚きの色を隠そうとしない。

ゴオウ……!!

「ちよ、直撃……!？」

今放ったプラズマビーム砲はそうそうなモビルスーツで防げるような物ではない、恐る恐るイザーク機、特殊型ゲイツの姿をじっと見やるキラ。

スウ……

「う、うわっ!？」

刹那、キラの目の前にイザークからのサーベル光が突き付けられた。

「腕部のビームコートで防げると思ったらから、こういう手も打てるさ」

「パラエーナビームをよく我慢出来ましたね……」

「時間切れの核動力無しモビルスーツで、アイツの火力の真似事が出来るものかよ、キラ」

緊急用の予備のバッテリーがあるにはあるのだが、キラの機体はもはや活動を停止し

ている。それを知ってか。

「お前と俺の青いスーツが」

トウ……

「気に入らないと?」

「俺たちコーディネーターにとっては、さ」

動かないキラ機をゲイツはその手で小突きながら、微かにイザークはその顔へ笑みを浮かべてみせる。

「どうも縁起の悪い色だ」

「地球の色、ですからねえ……」

「ゆえに、お前達出来損ないのような」

そのイザーク隊長の嫌味な口調にキラのその眉がひきつるように縮こまったが、何か言いたい事があるらしき彼のその声の強さに、グツと彼女キラは喉の辺りまで出た言葉を飲み下す。

「模範的なコーディネーターの枠から外れた者、昔の俺の隊長みたいな人間にとっては」  
前大戦の頃にイザーク、目の前にいる彼が所属する部隊長を務めていた男は優れた指揮官、パイロットでこそあつたらしいが、何か大きな持病を抱えていたらしいとはキラも聞いている。

「幸運を呼ぶかもしれないな」

「何故、そう言えますか？」

何か自機の通信機へ呼び掛けがあるらしいが、通信状態が悪くテレビモニターへも砂嵐が疾る。イザークのゲイツに牽引させてもらいながら、キラは彼の言葉にその耳を立て続けた。

「お前と同じ名前の奴のガンダムが青い色をしていたからだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何ですか、失礼な」

「異常なコーディネーターには青色は何か、縁起とパワーを呼ぶのかもな」

再び同じような言葉を言い放ったイザークが乗るその機体へとしばらく視線を向けてつづけたキラは、その言葉をしばらく頭の中で咀嚼をした後、彼のある言外の気持ちに気が付く。

「あたし達、ダークブルースへ向けて嬉しい世辞を言ってくれているので？」

「良くも悪くも」

ガッ、ガア……

僅かに通信機が復活をし始め、シホからの声が途切れ途切れに聴こえてきた。

「強くも弱くもに、遺伝子異常者である青服の連中は」

キラから見るに、アグレッサを引っ張る試験型ゲイツの方も通信機が故障をしていた

らしい。蘇生した通信機の出力を上げ、観測機モビルスーツで二人の戦いを記録していたシホ機からの声にその耳を傾けるイザーク。

「SEEDとやらの発現率が高いのではないかという、一種の個人的な妄想だ」

「戦場でのオモシロ話、火事場のバカ力の類いですよね、シード」

「ああ、ちよつとまでキラ……」

そのアグレッツサのキラからの話を遮り、イザークはシホからの伝令に集中をし始めた。コクピットの中のキラはその口を閉ざしながら、不良品に近いアグレッツサの機体コンディションの確認を試みた。

「キラ」

「はい、イザーク隊長」

「基地へ帰ったら、まずは休憩」

「何かありましたね」

アグレッツサへ向けてそう語りかけながらも、イザークは未だシホからの伝達へと耳を尖らせているようである。

「この基地から程近い宙域に確認をされた」

フオ……

二人の機体へ、シホの観測機が合流をし、彼女の機体もアグレッツサを支えてくれた。

「不明の武装艦に対する調査だ」

「武装艦、テロリストでしょうか？」

「それを調べるのが仕事だろう、キラ」

愚痴混じりのイザークのその言葉と同時に、キラ達の部隊に所属をする他のモビルスーツ達がアグレッサ達を出迎えに来る。

「ちようど、ゲイツのパワーが尽きた所、好都合のお迎え達だな」

「核動力、やはり勿体無いですよ」

「だから、俺に決定権は無いって……」

電動式ではモビルスーツの発展が寸詰まりになると主張をしているシホ、シホ・ハーネンフースの核エンジンへの未練は今に始まった事ではない。

「小競り合いは終わる気配がありません、高性能モビルスーツは必要です」

「とは言っても、もう連合もプラントも以前みたいな戦争はやらんだろうに、シホ？」

「いつからそう樂觀的になったので、隊長？」

可愛くその口を尖らせて不満を口にする彼女へイザークは苦笑ってみせながら、援護に来た青服部隊「ダークブルーズ」のモビルスーツ達へそのゲイツの手を軽く揺らしてみせた。

「俺の本来の仕事の為には、そっちの方が良いに決まっている」

「兼任をさせるとは、プラントの上部の人もイザーク隊長に無理をさせて」

「仕方がないさ、シホ」

小惑星基地からやって来た機体達の内、電子戦機がイザークとキラの機体頭部へとケーブルを差し込み、データの収集を始めだす。

「基地へ帰投してからやればいいものを」

「この電子戦モビルスーツの実地性能チェックもしたいんだよ、キラ」

「戦争が終わったと言うのにね」

コクピット内で電子戦機を駆るダークブルーズの同僚に対して不満を口にするキラを無視し、イザークはシホとの会話を続けている。

「所詮本当の青服、デスクワークの制服組では俺は新入りに過ぎない」

人手不足の為に急造された青服部隊、そのパイロットスーツの色がイザーク、責任者として選ばれた彼が本来その身体へネクタイと共に身につけるフォーマル・スーツの色、それとイレギュラー部隊の隊員達の服の色が同じだというのは誰の皮肉であろうか。

「俺にその仕事のイロハを教えてくれる人には、とても良くしてもらってはいるが」

だか、そのイザークの直属の上司である気鋭の議員、次期の評議会議長と噂をされている彼がこの部隊の制服の色を定めたとの噂もイザークは聞いている。

「政治に関わる仕事など、まだまだ降りる物でないな」

「したつばさんはツラいですわねえ……」

「よし、貴様!!」

嫌みに話へ割り込んできたキラ・キールの言葉に相当に神経へ来る物があつたのか、イザークがゲイツの中から突如として大声を張り上げた。

「俺の名を言つてみる!!」

「ちよつと、イザーク隊長……」

喧嘩を売るようなキラの言葉も悪いには悪いが、シホにしてみれば自分が敬愛する男、イザークの人間沸騰湯沸し器の部分は何とかして欲しいとは思ふ。

「お美しくも素晴らしき腕でモビルスーツを駆るイザーク・ジュール!!」

「世辞など誰が言えと言つた!」

あえて「うつとり」を演じてみせるキラに対し、とんでもない大声を張り上げるイザークの怒声はその周囲の全てのモビルスーツパイロット達の耳を強く打つ。

「顔の御傷はなぜ治さないのですか!」

「何をバカにしている、俺の何を!」

「どこの愚か者に付けられたので!」

「貴様、名前は何だ!」

「キラ・キ……」

「オマエ、貴様だよ、お前!!」

ブオン!!

最後のイザークの咆哮と共に、試験機ゲイツの右の握り拳が強く宙へと跳ね上がる。

「あの時みたいに痛い痛いと言ってみせろ、女!!」

「嫌ですよ、女へ手をあげた卑劣なあんなかにな!!」

そのイザークとキラのやりとりにより、他のダークブルースから乾いた笑い声が各々の通信機から漏れ出して来るのに、シホは自機のコクピットで自分の顔、こめかみだかそこらの部分に痛みが疾るのを感じてしまう。

「名前が悪いのよ、名前が……」

「俺はアイツの態度も気に入らないぞ、シホ・ハネフシ!!」

「ハイハイ、間違いですね……」

イザーク隊長、部隊設立時の彼との顔合わせの時に、自身のバイオリズムが「負」の状態のキラがその舌へと乗せた下手極まりない世辞。

「間違っている、男にはやらねばならない時があるのだよ、シホ!!」

「あたしの名前の事ですよ、全く……」

そこでのやり取り、今まさにイザーク達が再現をしてくれた一連の流れの「トリ」に

頭が沸騰した彼が無意識に放ってしまったアツパーカット。その一件はこの青服達の間だけではなく、ザフト全体でも良い語り草である。

登り始めた朝日が、この上なく美しい青天を、清々しく澄んだ朝の空気を照らし出す。  
「ではよろしく頼むよ、トダカ君」

「お任せを、ユウナ殿」

歳の頃は三十を越えていると思われるが、どこか年齢不詳の面差しがある男、トダカと呼ばれた男は彼にとっては目上と思しき青年へ敬礼を試みさせた後、背後へ立つ自身と同年代と見える壮年の者のその手を軽く握った。

「御無事を、トダカ一尉」

その手を握られた軍服の男は、そう言った後にニタとその面を綻ばせる。

「いや、三佐」

「戦後のバーゲンセールで貰った佐官だよ、ババさん」

「頭数を揃える為の、全軍人同時昇格なんで、そうそうあつてたまるものですか……」  
どこもかしこも、宇宙へ浮かぶプラントにしろ地球上に構える国家であるオーブ連合  
首長国にしろ、前大戦での人的損失の穴を埋める為にその頭を悩ましているのは同じこ  
とだ。

「コソコソをしたプラントへの船出になりますな、トダカさん」

「まだまだ我らオーブと地球連合は」

突貫工事によつて、どうにか使用に耐えられる状態に出来た簡易マスドライバー、大  
質量射出器の鉄骨部分を強く照らす太陽の反射光にその目を細めながら、オーブ国軍所  
属のトダカは自身のその短髪へ右手を差し入れ、軽くその口からため息をつく。

「休戦を成したばかりだ」

「とにかく刺激をしたくない、と」

「兵をつけるのも避けるよ、ババ一尉」

「フム……」

そのトダカ以上に前線任務に詳しいババ一尉はその彼の言葉に対し、微かに不満げな  
表情を見せてしまう。

「まあ、ともかく……」

彼らオーブの住人にとつて、やんごとなき立場である名家の出身であるユウナ青年。

彼がその髪へ塗りつけているヘアクリームの香りがトダカ達の所まで潮風で運ばれる。

「大船に乗った気でいてくれたまえ、君達」

「セイラン家の人間も良い所があるようだな、ババさん」

その整髪料の匂いに顔を微かにしかめながらも、トダカは青年の顔を立てているのか貶しているのだから、微妙に不器用な言い回しの言葉をババ一尉に向けてその口から言い放つ。

「船の調達に、護衛の傭兵達の手配……」

「ちゃんと返してくれよ、僕の可愛いクルーザーはさ」

「了解致しましたよ、ユウナ殿」

そのトダカの言葉がユウナの耳へ入ったのか入らなかったのか、ともかく彼が機嫌を損ねなかった事にババは心の中で小さく安堵の息を吐いた。

「しかし傭兵、金で動く人間か……」

その傭兵の機体、モビルスーツにしても目の前のシャトルに積み込めるのはせいぜい二、三機といった所。それがババに危機感を抱かせている原因である。

「傭兵、信頼が出来るので？」

「全く問題は無い、信用出来る」

カッ……

そのトダカの言葉を受けても、コンクリートの滑走路へ足音を響かせて近くへ寄ってくる傭兵達へ向けるババの視線は険しい。

「中にいる子供達を売り飛ばされては、たまったもんじゃない……」

「聞き捨てならないな、一尉殿」

傭兵達の内、端正に顔立ちが整われた銀髪の青年がババに対してその口の端をユラリと歪めてみせる。

「……までオーブの機密に食い込んだ俺達が、信頼を失って良い上客を逃すとも?」

「フン……」

その年若い傭兵の言葉を鼻で笑ったババ一尉、彼は一月前に男子、第一子を授かったばかりのせいか、少しシャトルの中にいる戦災孤児達へ対して感情移入をし過ぎているのかもしれない。

「そういう事だ、ババさん」

「あなたがそう言うならね……」

が、それ以上に先の戦争で自身の愛人、そして近々自分の戸籍へと入れるつもりであった彼女との子を失ったトダカ三佐。彼がこの傭兵達を信じると言うのであれば、ババはそれ以上は何も口に出来ない。

「ではトダカ三佐殿、我らは先にシャトルへ」

「任せる、効（ガイ）君」

「お任せを」

効と呼ばれた傭兵達のリーダーは、あかたも正規の軍人のような礼をトダカへと返してから、傍らへと立つ銀髪の男の肩を叩いた。

「久しぶりの宇宙だ、イライジャ」

「宇宙には良い思い出はないんですけどね……」

自分のリーダーへ向けて、その両肩を竦めながら皮肉げな目を向ける傭兵「イライジャ・キール」もまた、トダカとババへ一礼を試みさせてから、朝日を浴びて輝くシャトルへとその脚を進める。

「おい、効君!!」

「何か、三佐殿?!」

自分達の請け負った仕事の最終チェックの為、歩きながら携帯端末へその視線を落とされていた効、叢雲効（ムラクモ・ガイ）へ向けて、トダカがどこか慌てたような声を投げつけた。

「兵は君達二人だけか?!」

「最初からそういう契約でしょ!?!」

「話が違う!!」

「そうなのですか、佐官殿!？」

「ババさん!!」

いきなり口調が乱暴へと変わる、彼が慌てた時に出てしまう癖には慣れているババは、その怒声に怯えた顔を見せるユウナ青年とは逆に落ち着き払ったものだ。

「はい、なんですかねえ?」

「君も宇宙へ上がれ!!」

「はあ!？」

「ムラサメ・ゼロの宇宙間テストが出来ないんだよ!!」

「待って下さいよ、トダカさん!!」

そのオーブ製の次世代モビルスーツの名前を聞いた時、ババの顔色が蒼白へと変化を  
する。

「あの試作機がよりによって!？」

「宇宙でのクルージング、単なる慣熟飛行で模擬戦闘もないよ!!」

「そういう問題じゃありません!!」

その二人のやり取りに、傭兵の二人が何事かとトダカ達の方を振り返るのも気にせず、オーブの軍人二人は大声を上げ続けた。

「私には産まれたばかりの子と妻が!!」

「君もオーブの軍人だろう!!」

「せめて、家内へ顔の一つでも見せてから行きたい!!」

「シャトルの発進に間に合わんだろうに!!」

「全く!!」

そう言い捨てたババ一尉は海より深いため息をついた後、肩を怒らせガニ股でシャトルへと脚を進め始める。

「ゼロ・ファイターで私が何度も事故に合った事は知っていますように……!!」

「大丈夫、オーブのモビルスーツだよ!!」

「それでも、宇宙でのテストは初めてでしょうに……!!」

オーブ国軍で一番の勇猛さと腕前を誇るババ一尉にしても次世代機、零戦の信頼性の無さは彼に二の足を踏ませるのに十分な「実績」があるのだ。

「大変だねえ、軍人さんは……」

「何をおっしゃる、ユウナ殿」

トダカ達の元へ戻ってきた傭兵二人の呆れたような視線をその身へ受けながら、トダカはやや乱暴にユウナ青年のその高級スーツの裾を掴み、厳しい口調の声を出しながら彼の顔を睨み付ける。

「あなたにも来てもらいますよ……!!」

「ええ!？」

「私の独断の見届け人になって欲しいのですよ!!」

フオウ……!!

シャトルのエンジンへ火が入る音がトダカ達の耳へ入り、同時にマストライバーの管制室からスピーカーでクルーザー・シャトル「カガリ丸」の発進間近を知らせる音声がか蒼天へと響き渡った。

「嫌だよ、僕は!!」

「宇宙の観光旅行、良いものですぞ!!」

「宇宙酔いが怖いんだよ!!」

「傭兵掛けるの御二人!!」

何かこの上なくぞんざいな呼ばれ方をされた二人の傭兵は、どうしたものかとしぼしお互いにその顔を見合わせた。一つ互いに目配せをした後に傭兵のリーダーがユウナの腕に自分の腕を絡ませる。

「パパア、助けてエ!!」

「あなたもババになるんですよ!!」

「パパア……!!」

その傭兵と反対側の腕をトダカに掴まれ、シャトルへと引きずられていくユウナの絶

叫が朝の息吹を残している青天へと響き渡った。

## 第2話 「自由が放つ楔」

「えーと、ジャステイス対フリーダムだからジャステイスの負け……」

「あのですね、ユウナ殿」

スーパークルーザー「カガリ丸」の艦内へしつられた一室、畳を敷かれた和室の中、同じオーブ軍仲間であるババ大尉と軍人将棋を行うトダカ三佐は審判役のユウナ青年を鋭く睨み付けながら、あぐらをかく自身の膝を平手で叩いた。

「駒の名前を言ってしまうっては、軍人将棋にはなりませんぞ？」

「んなこといったって……」

ジューズをその口へ含みながら、ユウナは軍人将棋、その駒同士の勝敗表を片手にその口先を尖らせる。

「いくら説明されても解んないんだよ、この軍人将棋とやらは」

「ちよつと待って下さい、ユウナ殿」

「何ですか、アレックス君？」

トダカとババの対局、それをじつと眺めていた、あまり似合っているとは言えないサ

ングラスをその顔へと掛けた青年が畳から立ち上がり、ユウナの勝敗表へその顔を突っ込んだ。

「ジャステイス、フリーダムに負けるのですか？」

「そうなっているよ、この表によれば」

「気に入らないな……」

ユウナ青年よりは僅かに歳が若い、まだ少年とも言える彼はブツブツと呟きながら、ユウナとその顔を密着させて軍人将棋の表、その勝敗内容全てへその視線を巡らせているようだ。

「大将、カガリと書いてあるな」

「オーブの姫様だからね、アレックス君」

その名前をユウナが舌へ乗せた時、彼の隣の顔、アレックス青年が微かに、何かが入らないかのようにその両眉をきつく締め合わせ、眉間へと皺が出来る。

「大将はスパイに負けるか……」

スパイ、その言葉をアレックス青年が口にしたとたん、オーブ国軍三佐トダカの目が細められ、笑いの色が浮かぶ。

「アレックス君、二重スパイは大変だな」

僅かに嫌みが込められているその言葉、そのオーブ軍の軍人へむつとした表情を差し

向けるアレックス青年に構わず、トダカはなに食わぬ顔で茶菓子を摘まんだ。

「僕はザフトの人間ではない、トダカ三佐」

「私はザフトのザの字も言っていないなあ……」

とぼけたふりをしながら、茶を飲み干すトダカへと向けるアレックスの視線は鋭い。が、彼は一つため息をついた後、畳の上へ座り込みながら懐、ポケットから携帯端末を取り出し、気分を変える為に端末のモニターへニュースを映した。

「連合、プラントと共に難民の受け入れ開始か」

「そうだな」

「パチイ……」

ババの打ったコマが相手、トダカの陣地へ向けて攻め込む。

「ええと……」

「この船にも乗っているさ、アレックス君」

またしても対戦表へその目を泳がせているユウナの傍らでトダカがそう呟くように言った後、コキリとその肩を一つ鳴らす。

「可哀想な子だ……」

「この機体」

イライジャ・キール、傭兵部隊「サーペントテイル」へと所属をしている男が、目の前へとそびえ立つモビルスーツを指差しながら、軽くハンガーデッキの床を履いているブーツでコツリと叩く。

「ザフトからのテスト請け負いなんですかね、効」

「完成度を高める為の外部者によるテスト、その依頼さ」

少し神経質そうにその顔へ掛かったサングラスをレンズ専用の布で拭き上げながら効、サーペントテイル隊の長である彼「叢雲効」が新型のザフト製モビルスーツ「ツダ」のその顔へ向けてじつと、鋭くその眼鏡の奥からの視線を注いでいる。

「ザフトの新型、ね」

「なんでも、スピードだけならあのフリーダムと同じ位らしいぜ、イライジャ」

「マサカア……」

前大戦時の超高性能機フリーダム・ガンダム。圧倒的な性能を誇ったと言われているその核動力機と同じレベルの機体と言われても、さすがにイライジャには半信半疑のそ

の表情。

「ああ、ひよつとして効」

「ん？」

「こいつも核の心臓を持つモビルスーツなのか？」

「インヤ……」

コッ……

何か背後、ハンガーの扉の方で物音がしたが、効は気にせずそのままイライジャ、傭兵隊サーペントテイルでの自分の右腕とも言える男へ微笑みかけた。

「通常電力」

「なおさら、眉唾だよ……」

「お前が先に乗るか、フリーダムモドキに？」

「どうしようかな……」

モビルスーツが数機押し込むのがやっとの急造ハンガー、その中をイライジャは自身の顔、端正な面立ちを持つその頭の後ろへ自分の両の手を置き、口笛を吹きながら洗ったばかりのの銀髪へ指を絡ませる。

「フリーダム……」

「あん？」

ポソリとした、抑揚の無い少年の声。

「フリーダム……」

「なんだよ、坊主？」

いつの間にか効達の背後へ立っている、クリーム色の上っ張りを身へと纏い、黒い乱雑な髪をした少年。

「ここは立ち入り禁止だ、帰りな……」

「フリーダム……」

「おい、坊主？」

その下を向いたままの少年の顔は髪に隠れており、効達には見ることが出来ない。いや、それよりも彼らにとっては病院での入院患者にしか見えない資格好の少年が繰り返す「フリーダム」という声が何か耳へと刺さる。

「どうする、効？」

「どうも何も」

効は軽く肩をイライジャへ竦めてみせてから、その少年の細い肩へ優しくその手を置きながら微かにため息をついてみせた。

「このクルーザーの責任者、あのトダカさんに知らせるしか……」

「フリーダム!!」

ダアウ!!

「おい、小僧?!」

肩へ置かれた効の手を乱暴に振り払い、少年は目前のモビルスーツ「ツダ」のコクピットへ連なるハシゴをよじ登り始める。

「やめろ、おい!?!」

「フリーダム、フリーダム!!」

髪を振り乱す少年の持つ赤い瞳、それが放つ恐ろしいまでの眼光に、一瞬とはいえ歴戦の戦士である二人の傭兵の背に冷たい物が疾った。

「イライジャ、通報だ!!」

ハシゴから黒髪の少年を引きずり戻そうと効もその後を追いながら、彼はイライジャへ緊急通報のスイツチを押すように指示を出す。

「くそ、通報器はどこだ!!」

デッキの出口、その周囲へその視線を素早く巡らせながら焦りの声を出しているイライジャ。

ジャ……

「ここにいたか!!」

そのイライジャのちょうど横、ドアから二人の男が額に汗をかきながらモビルスーツ

の格納庫内部へ風のように進み出る。

「ガア、ガアン!!」

「フリー、ダァム!!」

「やめろ、小僧!!」

閉じられたツダのココピットの扉をその手を振り上げ、何度も叩く少年を効は片手で抱えあげて急いで木製のハシゴをすり降りる。

「早く降りろ、傭兵!!」

「解っている!!」

ハシゴの元へと駆け寄った男、彼がその身へと纏う白衣からこの少年の主治医だと判断した効は、暴れる少年を抱える腕へ強く力をいれながら、片手のみで素早くハシゴを降りきった。さすがに少年を抱えていた彼の息は荒く、やや乱暴に少年をハンガーの床へと降ろす。

「カアラ……」

効が少年を鉄製の床へ下ろした時、彼の上つ張りから音を立てて床へ落ちる、一般市販をされている携帯端末。

「マユウ!!」

その携帯電話へ手を伸ばし、床へ這いつくばってその電話を両手で握りしめながら震

えている少年の口へ、駆け寄った医師が何か彼の口へ布の様な物を押し当てた。

「軽いノックアウト剤だ」

「ああ……」

医者の方へ遅れてやってきた、松葉杖を片手へと持つ男が医師と一緒に少年を押さえつける手伝いをしたまま、彼らの様子をじっと見ている効達へそつと囁く。

「マユ……」

鎮静剤が効いてきたか、少年の声がか細い物へと変わり、その彼の両目が薄く閉じられる。

「なんなんだよ、コイツは……」

そのイライジャの声には医師は答えず、少年の身体、主にその白い手のひらへとついた擦り傷、モビルスーツのコクピット・ハッチへ登り、素手でその機体の装甲を叩いた時にできたものであろうそれらへのチェックを終えた後。

「迷惑を掛けた、君たち」

その双眸からやや冷たく感じる光を放ちながら、軽く傭兵達へとその頭を下げた。

「早くその物騒な小僧を連れてつてくれよ、お医者さんよ?」

「すまん」

再度詫びの言葉を口にした医師は、その細身の身体からは想像がつかない程軽々と気

絶をしている少年を片手で持ち上げ、自身の背へと覆い被せる。

「あの医師、元は荒事の間人か……？」

「そうかな、効？」

「あるいは、パイロット……？」

どこか、その医者の子のこなしに自分達と共通するものを感じたのかもしれない。ドアへと向かって去っていく後ろ姿を眺めながら、歴戦の強者である効はそう呟きながらズボンのポケットへとその手を差し込む。

「軍属医師、かもな」

「どうだっさいいさ、もう……」

ズボンから取り出したタバコ、火が付いていないそれを口へくわえながらブツブツと口ごもっている効を無視し、イライジャは少年が荒らしたハンガーデッキの周囲へその視線を這わしていた。

「このツダも、また念の為にチェックをしておかないとな」

「神経質だな、イライジャ」

「明らかにハシゴの一部が装甲の隙間に食い込んでいるんだよ!!」

「あ、本当だ」

「ハア……」

普段は全く隙の無い、用心深さの塊である叢雲効、彼が時おり見せる間の抜けはイライジャの頭を妙に痛めさせる。

「大戦争が終わっても、戦いの道具の手入れは終わる気配がねえな、全く……」

「その通りだな、本当に」

「ん？」

カッ……

「戦争は、さ」

医師の男と一緒にハンガーへ入ってきた、松葉杖をその片方だけの手で支えている隻眼の男が効たちへ近寄り、少し馴れ馴れしく声を掛けてきた。

「終わっても、終わらないんだな」

「作業の邪魔だから、あんた……」

「違うかい、傭兵さんたちよ？」

「チッ……」

少し、その頭へ血が昇りやすいのは彼イライジャがまだパイロット、戦士として完熟をしていない証なのかもしれない。

「あんたの身体もそのクチかい、オッサン？」

その無遠慮極まりないイライジャの言葉、それが彼の口から放たれたということとは、

よほど今の少年がしでかした事が腹へ据えかね続けているのだろうか、しかし。  
ゴツウ!!

「この俺の拳に免じてき、アンタが」

「ああ、ああ……」

全力でそのイライジャの頭へと降り下ろされた傭兵隊長の拳。そのあまりの衝撃に床へ膝を付きながら呻くイライジャを指差しながら。

「今のコイツの言葉、許してくれると助かるよ」

「良い男だな、あんたは」

面を下げる効に対して、その壮年の男はにこやかに笑う。

「おい、ミスタータイガー」

意識が朦朧としている少年を抱えた医師が、その松葉杖の男へドアから強い口調で呼び掛ける。

「あんたもあまり出歩かないで欲しいな、全く……」

「ついあのおチビが常に呟くフリーダムという言葉」

そう言いながら、一本足で器用に床を踏みしめながら男が医師へ振ってみせる木製の杖。

「それが気になってしまって、な」

「まだ新型の義足等、それを造る為の身体データ収集の途中であつたはずだ」

「すまない、ミハイル医師」

そのタイガーと呼ばれた男、彼は不自由な身体なのに関わらず、身軽に杖を床へ叩きつけながらその医師達の後をついていった。

「もう、何も起こりませんように、起こりませんに……」

「神頼みはあまりあてにしない方がいいぞ、イライジャ」

ハンガーデッキ内は禁煙であるはずであるが、いつの間にか効のタバコには火が灯つているのをその視線へ入れたイライジャは。

プツウ……

頭の右と左の方、そして先程インパクトを受けた中央へ等しく、何か銅線が切れたような音と共に頭痛と高揚感が訪れてしまった彼、傭兵団サーペントテイルのメンバーは。

「フンヌ!!」

「おい、折角の色男が台無しだぞ……」

「うるせえ、効!!」

新型モビルスーツの点検をするために、その顔へ近くの濡れた手拭いを絞り、ハチマキとして巻き付けながらハシゴを猛スピードでよじ登り始めた。

「ん?」

何か、通路から聴こえてくる声、何かを叫んでいるような叫びにアレックスはその両手にそれぞれ掴んでいる軍人将棋のコマから微かにその視線を離す。

「……ダム!!」

「何だ?」

和室の片隅で肩肘をついて居眠りをしているババ一尉を除き、アレックスが見るに他の面子もこの声は聴こえたようである。

「アレックス君、勝敗は?」

「あ、ああ……」

それでも、ユウナ青年と対局をしていたトダカが、煎餅をかじりながら審判を務めているアレックスへ急かすような声を出した。

「フリーダムとこのコマだから……」

トダカ達に聞こえない位の声をその口の中へと呻かせ、畳の上であぐらをかかせている足の上へ置いてある勝敗表へその視線を向けたアレックス、彼がコマのジャツジを行おうとしたその時。

「フリーダム、フリーダム!!」

「薬の効きが短すぎる、体質か?」

絶叫とも言える、少年と思しき声色の声。未だ声変わりすら起こっていないだけに、深い凄惨さすら感じさせるその声、いや。

「悲鳴、か……」

「彼、だな」

「トダカ三佐?」

アレックスが何かを問うようなその視線に、トダカはすぐには何も答えない。対局者のユウナ青年はただあんぐりと間抜けにその口を開けているだけだ。

「ミハイルさん!!」

「助かる、手を貸してくれ!!」

ちょうど間が悪いのか何か、少年を担当しているらしき医師達はその場、アレックス達がいる和室の閉じられたドアの前で処置を行い始めたようである。

「フリーダム……」

「フリーダム、か……」

医者達が再び薬を投与したのか、少年のその声は徐々に小さく、低くなつていくのをその耳へ感じながら、アレックスは扉一つ越えた先から聴こえた、少年が言い放つ単語が彼の記憶の中にある人物、それと容易に結び付いた事に軽く息を吐く。

トツ……

その声に注意を奪われたアレックス、彼の手から軍人将棋のコマが床へ小さな音を立てて、落ちる。

「おさまった、今のうちだ」

「私は脚を持ちますよ、ミハイル」

ドアの奥、連絡通路から立ち去つていく医師達の足音を聴きながら和室の面々は。

「……」

床へ落ちてゐる、蒼い翼をその背から生やしたようなシルエットを持つモバイルスーツが描かれたコマをじつと見つめてゐる。

「あのねえ、君……」

「すみません、ユウナ殿」

「タイミング、空気が読めない奴と言われたこと、ない？」

パリー……

そのユウナ青年がアレックスへ向けて言い放った言葉、その正論とも言える台詞をその耳へ入れながら、トダカ三佐は目を瞑ったまま口の煎餅を機械的にその歯ですり潰す。

「ふう……」

和室の片隅、そこから流れてくる小さな音の吐息。

「あまり、気に病まないで下さい、トダカさん」

「やはり起きてたか、パパさん」

「そりゃあ、あの騒ぎではね……」

一つ伸びをしてみせながら、肩を鳴らしているパパは枕の代わりとしていた座布団の脇へ置いてあったポットから茶を湯呑みへ入れ、それを一つ口へ含みながらトダカの横へドツカと腰を下ろした。

「あなたには何の責任はない」

「そうではあるのだが、な」

「無論、フリーダム・ガンダムで我らオーブを助けてくれたあの彼にもだ」

そのパパの慰めの台詞、その中に含まれている単語の一つ一つに大きく関係があるアレックスにとっては、まるで自分が責められているような心境である。

「キラ・ヤマトが先程の少年の大事な物を奪った？」

「ストレートな発言は身を滅ぼすぞ、アレックス君」

「悪い癖ですね、俺の」

「ヘヴィなんだ、私にとつてもあの少年は」

何やら彼らアレックス達から距離を置き、部屋の片隅の通信機へ囁いているユウナへトダカは少し冷たい視線を投げつけながら、ババから手渡された湯呑みの茶を軽くすすり、言葉が続ける。

「四六時中、一緒にいるのはキツい」

「わかります、トダカ三佐」

「彼を診てくれている医師からも距離を置くように言われている」

「なるほど……」

おそらく、その医者とやらはトダカの心身、精神状態も案じているのであろう。

「あなたは彼、あの少年を助けたのですね？」

「タイミングが悪いのに、勘は鋭いんだな、君は……」

「一応は、戦いの場にその身を置いていた人間ですから」

「オーブの正義、それを正義の機体とやらで守ってくれたんだろう、君は？」

「さあてね……」

そのぎょちなく肩を竦めてみせるアレックスの仕草、お世辞にも様になっているとは

言えないが、それでも前大戦で心に大きな傷を負っておるトダカにとってはこういう気遣いは嬉しいものだ。

ポリイ……

「あんまり、食べない方が良いでしょう」

「はい？」

再び煎餅にその手が伸びたトダカへ、頭を掻きながら彼の隣に自分の腰を落としたユウナがその菓子に入った盆を自らの元へと引き寄せる。

「何故ですか、ユウナ殿？」

「もうすぐ、出前が来る」

「え……？」

ニンマリと笑いながら言い放つユウナ青年のその台詞、それにはババも少し驚いたような表情をその顔へ浮かべていた。

「先程の電話、助けを求めたのではなかったのですか？」

「何に對してだよ、トダカ君？」

「いや、その……」

確かに、別にこの場にいる者には何も異常な事は起こっていない。単にこのユウナ青年が世間知らずの「坊や」だからと勝手に、先程の異常な少年の一件に脅えを感じて護

衛だか何だかを呼び寄せたと思っただけである。

「気分転換、ご飯でも食べようじゃないか、君達」

「アア、そうか……!!」

「特上うな重、四人前にしといたよ」

「あなたという人は……」

そのトダカ三佐が微笑みと共に漏らす声、それを聞いた時にアレックス青年は。

「こつちから取りに行こう、ユウナ殿？」

「いいね」

明らかに作った、偽物のそれとは言え、明るい声でそう言い放つアレックスにユウナが即答をする。

「カガリは行動的な男が好きだと聞いているからね、僕は」

「まあ、そうかな……」

「ボヤボヤするなよ、アレックス君」

少し、そのカガリという人物の名前がユウナの口から出たときに、結局プラントへと急遽トンボ帰りをする羽目となってしまったアレックス。彼はいわゆる「それなりの仲」である彼女へ会えなかった事に対して。

「会いたかったもんだはあるよな、俺は……」

「お腹すいたなあ、アレックス君……」

「ハイハイ……」

彼が心に一抹の寂しさを感じ、軽く感傷に浸っていたその最中、わざとらしく不精な声を掛けてきたババに向けて再び不器用に肩を竦めてみせてから、彼アレックス・デインはドアから飛び出したユウナ青年の後を追いかけていった。